〔覆醬續集三〕靉靆（俗曰眼鏡、靆或作䨓、恐靆字誤也耶、詳見廣百川學海欣賞編等書）

靉靆發眼光、瞭然樂老逸、讀書點離朱、觀物逐那律、蠅頭細揮毫、蚊睫寬貫蝨、宿憊絕玄花、豈匪還童術、

〔寶藏三〕目器（めがね）

亡目の鏡法師の櫛は、たからながらも寶ならざるは、その用ゆべからざるが爲なり、此もの十年餘以前（本書寛文十年著）まではいづ方にか有つる、手にふれ誠に目にもかけざりつるに、此ほどはよるのほかげなどに、書を見るにも、またゝくやうにをぼろなるに、思ひ出てかけつれば、文字のあやめも一しほ明なるぞいと嬉敷、また心みにこれを論ぜん、眼力薄からずんば此物寶とならじ、若此ものを珍とせば、いかんぞ眼力のうすき事をなげかむ、又眼力のうすらげるをなげかば、めがねの珍たる事を悅ぶいはれあるべからず、えがたきめがねをたうとみ、よりゆく年をわすれんよりは、去かじ明なる眼にめがねも共に忘れんには、めがねに老若の差別有、老眼によきは若き人にあはず、わかき目によきは老眼にあはず、もし目がね必眼力をたすくといはゞ、老眼だに明にせるを、若きにかけばいよ〳〵明なる事をくはふべき道理也、されども老眼によろしきは若きによろしからざるは、物毎に其功能のさだまれる所あればなり、（略下）

〔書言字考節用集七器財〕麻姑手（マゴテ）　爪杖（同又云搔杖）

〔類聚名物考調度八〕爪杖（まごのて）

今案に、如意杖、一名は爪杖なれば、今云ふ孫の手と云ふ物にて、背中などのかゆき時に、搔べき爲に作りし、人の小手の如き物なり、

〔和漢三才圖會二十六服玩具〕爪杖（まごのて）　搔杖　末古乃天

按、爪杖用桑木作手指形、所以自搔背者、俗謂之麻姑手（末古乃天）麻姑仙女名也、五車韻瑞載麻姑山記云、王方平降蔡經家、召麻姑至、年若十七八女子、指爪長數寸、經意其可爬痒、忽有鐵鞭、鞭其背、以此故事

爪杖